

第15回 三稜会懸賞論文



第74号三稜会会報別冊

稲葉真弓賞特集

令和7年7月12日

発行 三稜会
(津島高校同窓会)

事務局(津島高校内)

〒496-0853

津島市宮川町3-80

電話 0567-28-4158

発行人 北角 浩一



(前列受賞者) 藤江結月さん

安藤美海さん

栗崎美桜さん

岩永アイラさん

荒川侑里さん

第15回 稲葉真弓賞(三稜会懸賞論文) 選考結果

テーマ 『生きる』

応募総数 527点(9校より)

入賞作 6点 …入賞された皆さん、おめでとうございます。…

〈最優秀賞〉1点	美和高等学校	1年	栗崎 美桜「この世で生きる」
〈優秀賞〉1点	愛知啓成高等学校	2年	安藤 美海「アントニム」
〈佳作〉4点	清林館高等学校	1年	藤江 結月「『生きる』とは何か」
(表記学年は 応募当時のもの)	津島北高等学校	2年	安田 潤人「移りゆく社会を生きるとは」
	美和高等学校	1年	岩永アイラ「自分らしく」
	愛知黎明高等学校	2年	荒川 侑里「生きるということ」

ご応募いただいた皆さん、ありがとうございました。

○5月24日(土)に受賞者の表彰を行い、賞状と下記の賞品が授与されました。

最優秀賞と優秀賞の受賞者には、中日新聞社により中日新聞社賞も授与されました。

最優秀賞 賞状と楯と図書カード5万円分

優秀賞 賞状と楯と図書カード3万円分

佳作 賞状と図書カード1万円分

(その他参加賞として 応募者全員に図書カード500円分が配付されます。)

【協賛団体】(株)ヨシヅヤ

虎ノ門法律経済事務所

(株)日本一ソフトウェア

クローバーTV・エフエムななみ77.3MHz

(株)三和スクリーン銘板

協和交易(株)

(株)原ネームプレート製作所

【後援】(株)中日新聞社



稲葉真弓賞 受賞作品

最優秀賞

この世で生きる

美和高等学校

一年 栗崎 美桜

現代社会における「生きる」という意味はなんだろうか。現代社会は、急速な変化と複雑な問題に直面しています。生活環境の変化、戦争や紛争、価値観の多様化、人種問題やジェンダー問題、地域格差や貧富の格差、環境汚染さらには高齢化や少子化など、多くの社会問題が私たちの生活に影響を与えています。このような状況において、「生きる」ということの意味を再考する必要があります。特に未来を見据えたときに、どう生きるべきかという問いは、私たち一人一人にとって重要なテーマです。

「生きる」という行為は、単なる生存を超えた深い意味を持ちます。生きることは、自己実現や他者との関係性、社会への貢献を含む広範な概念です。生存は肉体的な側面に焦点を当てていますが、存在は精神的、感情的な側面を含みます。生きることは単に生き延びることではなく、人生を豊かにする

経験を積むことです。人間関係の構築や自己成長、社会との関わりを通じて、私たちは「存在」を感じることができ

ます。人とのつながりは、幸福感や満足感に大きな影響を与えます。孤独感や疎外感が広まっている現代において、他者との関係を育むことは、より良い人生を送るための重要な要素です。生きる意味を探索することは、哲学的な問いでもあります。古代の哲学者たちは「善く生きる」ことの重要性を説きました。自己の価値観や信念を見つめ直し、自分にとっての「生きる意味」を見出すことが、より充実した人生を送るための第一歩となります。

現代は価値観が多様化している時代です。人々はそれぞれ異なる背景や経験を持ち、様々な視点から物事を考えます。この多様性は時に対立を生むこともありますが、新たな理解や共感を生む可能性も秘めています。異なる価値観に触れることで自分自身の考え方を広げ、他者の意見を尊重し理解し合うことで、共感を生むことができます。

価値観の多様化は、社会的責任を再認識させる要因ともなります。異なる価値観を持つ人々と共に生きる中で、私たちは共感を持ち、相手を理解しようとする姿勢が求められます。これにより、社会全体がより包摂的で協力的なものになることが期待されます。社会問題は、個人の行動によって変わる

可能性があります。環境問題に対して意識を持ち、リサイクルや省エネを実践することは、個人の小さな行動が集まることで大きな影響を与えることができます。

具体的な行動として、社会運動への参加が挙げられます。環境保護団体に参加することで、地球環境を守るための活動に貢献できます。また、地域のボランティア活動に参加することで、地域社会の課題解決に寄与することも可能です。SNSを通じて意見を発信することも、現代ならではの社会参加の一形態です。

20年後、30年後の未来を考えると、私たちはどのように生きていくのでしょうか。技術の進化や社会の変化に伴い、私たちの生活は大きく変わるでしょう。しかし、その中で「生きる」ということの本質は変わらないはずです。人間関係やコミュニケーションの重要性は今後も続くでしょう。AIやITの進展が進む中で、私たちはどのように人間性を保ち続けることができるのでしょうか。テクノロジーが進化する中で、私たちの生活は便利になりますが、同時に人間関係が希薄になる危険性もあります。

一度しかない人生をどう生きるかは、個々の選択に委ねられています。自分の夢や目標を追求すること、家族や友人との関係を大切にすること、社会に貢献することなど、さまざまな選択肢

があります。重要なのは、自分自身の価値観に基づいて選択し、その選択に責任を持つことです。自己実現は、生きる上での重要な要素です。自分の才能や興味を最大限に活かし、成長を続けることが充実した人生を送る鍵となります。

社会は常に変化しています。この変化の中で、私たち個人が果たす役割も重要です。教育の分野では、次世代に対して知識や価値観を伝えることが求められています。教育は個人の成長だけでなく、社会全体の発展にも寄与します。教育を受けた人々が社会の中で活躍することで、社会がより健全で持続可能なものになります。

「生きる」ということは、単なる生存ではなく、自己実現や社会への貢献を含む深い意味を持っています。価値観の多様化が進む現代社会において、一人一人が意識を持ち、行動することが求められています。未来を見据え、自分の人生をどう生きるかを考えることは、私たちにとって重要な課題です。自分自身の選択を大切にし、他者とのつながりを重視しながら、より良い社会を築いていくことが私たちの使命です。人生は一度きりであるからこそ、その一瞬一瞬を大切にし、意味のある生き方を追求して行くことが重要です。未来のために、今を大切に生きることが私たちに与えられた使命であると言えるでしょう。

アントニム

愛知啓成高等学校

二年 安藤 美海

私たちは生きている。一言で言ってしまうとそれ以上でも以下でもないが、ただ単に生命を維持するためだけに生きているのではなく、もっと大切な意味を持って生きていると思う。それは今までの人生でなんとなく分かっていたつもりだったけれど、生きることが当たり前になってしまい、生きるとはどういうことなのか、何のために生きるのかを深く考えないで日々を送ってしまっていた。

昼食の時に友達がふと「人間やめたいな」と呟いていた。何かあったのかと心配になり理由を尋ねてみたところ「なんとなく人間以外のものになってみたい時ってない？例えば犬とか猫とか」と逆に質問で返されてしまった。咄嗟に「ないかな。私は人間として生きるのが一番楽しいから」と答えたが昼食後もこの質問が頭を離れず、同じ「生きる」なのに人間として生きることと他の動物として生きることでは何が違うのか考えていた。

「生きる」とは、何かを成し遂げたり趣味に「没頭したり自然と笑顔が溢れるような時に強く感じるものだと思う。しかしそれがなくなっても生きていないということにはならないだろう。「生きるの反対は何か」と問われれば多く

の人は「死ぬ」と答えるだろう。それでも何かを成し遂げたり趣味に没頭したり自然と笑顔が溢れるような時以外は死んでいるのかというとそれは違う。むしろ苦しみを感ずる時こそ必死に生きていると感ずるのではないかとさえ思う。そこで、もしかしたら「生きる」を考える上で重要なのはその対にある「死ぬ」ということなのではないかという結論に至った。

対義語について調べていく中で、太宰治の「人間失格」に対義語についての言葉遊びが出てくるという情報を得たので、タイトルの意味も気になり「買って、読んでみた。「人間失格」は作者である太宰治の一人称を投影した本であるとされている。この本を読むことで少しでも、生きることと死ぬこと、そして人間として生きることについて何か分かるかと思ったが読んだことでそれがより分からなくなってしまった。

「人間失格」は五部で構成されていて、「はしがき」と「あとがき」は太宰治の視点で書かれているが、「第一の手記」「第二の手記」「第三の手記」は大庭葉蔵という人の人生を辿るように書かれている。「第三の手記」で大庭葉蔵は脳病院へ連れていかれたことで、廃人の刻印を打たれたとし「人間、失格。もはや、自分は、完全に、人間で無くなりました。」と語っている。しかし私は「人間で無くなった」と語る彼に逆になに人間らしさを感じた。彼は人の感情がわからないと語っているが、作品からは彼の生き苦しいという感情がひし

ひしと伝わってきて、私は彼とは置かれた環境も人に対する接し方も何もかもが違うはずなのに、隣で強烈に訴えかけてくるような文章に気がついたら、感情移入して読んでしまった。女に、酒に、薬に狂わされ取り返しのない事もしってしまった彼は、実は誰よりも純粹であるからこそ、人間が普段している当たり前の事にさえ傷ついてしまっていたのではないかと思う。

結局、対義語について一の言葉遊び、作中では、アントニムの当てつけと呼べれていたものは「罪」の対義語を考えて「罰」に辿り着く所で終わっている。そして、この他にも彼の罪を連想させるような場面は多くあるが、具体的に「罪」の対義語が何であるかは明かされないまま物語は幕を閉じてしまう。自問自答を繰り返したのちに何も分からないまま終わってしまうところは、まだ最期まで辿り着いたことはいないけれど、まるで人生そのものであるかのような気がした。

私は生きることに対しては楽しいイメージを、死ぬことに対しては苦しいイメージを持っていた。つまり人間として生きるには楽しくなるようなことが必要で、それがなく苦しんでいる人は人間として死んでいるということになってしまっていた。しかし「人間失格」の大庭葉蔵や他の苦しみの中で必死に生きて生きている人にも色は違えど、楽しんで生きている人と同じ生命の、そして人間として生きることの輝きを感じ取れることに気がついた。

今、世界では八十億人以上の人が生きている。その一人一人の人生を覗いていくことは不可能だが、少なくともその人たちが生きているということだけは分かる。その中の一人ではない私には「生きる」とは何か計り知れないことだったけれど、それが何なのかは断言できるようなことではないのかもしれない。それでも「生きる」ということの意味は、自分が自分である事を他の人や物と関わっていく中で発見していくところにあるのだと今の私は結論づけた。

まだまだこの世界には分からないものが沢山あって、私も人並みの死に対する漠然とした恐怖を持っているけれど、だからこそいつか必ず来ってしまう最期の瞬間まで、楽しいことも苦しいことも全部自分の生き方として大切に愛して、一度しかない自分の人生を後悔のないように生きたい。日々変化していくこの世界で、もしかしたら明日の私は生きるということに対する考えが変わっているかもしれないし、それこそ五年、十年、五十年、百年後には自分が生きているかどうかさえも分からない。そんな世界の中でより良く生きていくためにも自分の考えを忘れず、次に質問をされた時には「人間として生きるの一番楽しい」と胸を張って言えるようにしたい。



「生きる」とは何か

清林館高等学校

一年 藤江 結月

人間の「生きる」とは何かを問うとき、ただ呼吸をし、心臓が動いている状態だけを指しているわけではないと思う。確かに生物学的には心臓が動き、血液が流れ、肺は呼吸し、細胞が分裂し続けることが「生きる」の条件だろう。しかし、それだけで生きていると実感できるだろうか。むしろ「生きる」という言葉には、自分が何を感じ、何を目指しているのかという問いが含まれているように感じる。それは単なる生命維持以上のもっと深い意味を求める行為なのかもしれない。

中学生の頃、私はクラスで孤立していた時期があった。友人関係がうまくいかず、何を話しても相手の反応が薄かったり、私ばかりが話すようになって話題がすぐに途切れたりすることが続いた。そのうち会話も減り、話すこと自体がほとんどなくなつた。「どうして私は誰ともうまく話せないんだろう。こんな疑問だけが、頭の中をぐるぐると回り、教室に居る時間がどこか息苦しく、ただゆっくりと過ぎていく時間を静かに眺めているだけの日々が続いた。その空間にいることが、いつも見えない何かに押さえつけられているような感覚だっ

た。家に帰っても何もないはずなのに、なぜかずっと不安で、「当たり前」の生活をすることに疲れていた。

そんな中、私は自分の中の気持ちを整理するために、ノートに自身の考えや気持ちを書き出すようになった。「今日はこんなことがうまくいかなかったけど、明日はどうしたらいいだろう。」と、自分に問いかけてみたり、「今日はこれできた。次はこれをやってみよう。」と自分を褒めてみたり。人には相談しにくい気持ちを文字にしたりもした。そのノートは私もまだわかつていなかった自分自身と向き合える場所であり、思考や感情を紐解くための特別な空間だった。毎晩ベッドに入る前、その日の出来事や感じたことをたった数行でも素直に書き綴ることで自分の中にあるモヤモヤとした気持ちを整理していった。

また、本を読むことによって、文章特有の鮮やかさや表現の美しさにも触れた。そんな時に出会ったのが、三島由紀夫の「金閣寺」だった。この作品は、単なる読書以上の深い体験となった。吃音に苦しむ主人公・溝口は絶対美を象徴する金閣に憧れる一方で、その美に囚われ、その理想に引き裂かれる過程は、私自身が抱える「こうありたい自分」と「現実の自分」との差の苦悩に重なる気がした。特に、最終的に理想から拒絶され、「生きようと思った。」で終わる文が心に響いた。その生は、投げやりかつ不完全ながらも、私はそれでも生きるという

完璧ではない力強さを感じさせた。この本を通じて、理想と現実のギャップに向き合いつつ、自分なりの生き方を模索することの大切さを学んだ。

そこから私は少しずつ挑戦を始めた。例えば、掃除や体育の時間に自分から話しかける練習をしたり、普段あまり話さないクラスメイトに声をかけてみたりすることにした。それは決して簡単なことではなく、うまくいかない日もあった。話しかけようとしても言葉が出なかったり、相手が驚いたような反応を見せるようなこともあった。しかし、小さな一歩を重ねる度に、自分は変われるかもしれないという実感を抱くようになった。

そして、小さな成功体験の積み重ねが私の自信を少しずつ育てていった。会話が続きたり、相手が笑顔を見せてくれたり、向こうから話しかけてきてくれたりすると、とても嬉しくて自然と笑顔になり、次はもっと挑戦したいという気持ちが生まれた。この経験は、私にとっても大きな意義を持つていた。

もう一つ深く印象に残っているのは、学校でのグループ活動だ。あまり関わったことのない人ばかりで初めはただ聞いているだけだった。しかし元気に意見を交している様子を見て、自分もその輪の中に入りたいと思った。最初は思っている通りに意見を言えずに悩むことが多かったが、ある日、勇気を振り絞って次は自分から発言してみようと手を

挙げた。その瞬間、緊張で心臓がドキドキして少し汗が滲んでいたことは今でも鮮明に覚えている。意を決して口を開き、意見が受け入れられた時に喜びをきつと忘れることはない。自己肯定感が一気に高まり、さらに意見を言おうという気持ちが強くなった。この経験で、「人と協力することは怖いことではない」と思えるようになった。実際、意見を交したり、共に作業を進めたりすることは共感や理解が深まり、視野が広がる可能性があることに気がついたからだ。挑戦することで、自分自身の世界が広がっていく感覚を味わうことができた。

「生きる」とは何か。この問いに対する明確な答えを私はまだ見つけられていない。ただ、一つはつきりしていることがある。それは「生きる」というのは答えを探し続ける、過程そのものだということだ。過去の自分を振り返ればその時々決断や挑戦、迷いや苦しみがあったからこそ今の私がいる。孤独や挫折を経験したことで、他人の痛み共感する力が育まれたし、ささやかな幸せに気づき、感謝する感性を持てるようになった。生きることは簡単ではない。時には立ち止まり、時にはつまづく。それでも日々の中で自分の足で前に進んでいくことで少しずつ生きる意味が形作られていくのではないかと思う。そして、その形は誰かと同じではなく、私自身が一歩ずつ築いていくものなのだろう。

自分らしく

美和高等学校

一年 岩永アイラ

「生きる」。人や動物が生命を保ち、活動できる状態にあること。

この単語に、性自認がどうか、性の性別がどうかに関係あるだろうか。人権という言葉の意味に、人が人らしく生きる権利とある。人が「人らしく」。この説明が、性自認や体の性別もまた個性であり、侵害されることが決してあってはならないと物語っている。だが今の日本はどうだろうか。自分の性について悩みを抱える性的少数者が、社会や日常生活で生きづらい」と感じる人が多い。個性や差別によつて傷ついてしまっているのが現状である。だからこそ、自分は自分らしく、ありのままに生きていくということを変更して理解してほしい。

性自認について悩みを抱える人がいるが、私もその一人である。私は自分の性をXジェンダーの中性と自認している。これは男女どちらにも属さないというもののだが、そもそもXジェンダーという言葉聞いたことがない人が多く、理解されないこともある。Xジェンダーには四つの分類があり、そのうちの一つが私が属する中性であるが、トランスジェンダーのようにはっきりと男・女となっているわけではないため、自分でもうま

く言葉にできないときがある。ならば男・女とはっきりしていればいいのかというところではない。そのせいで逆に偏見や差別が生まれ、傷つく人もいる。この偏見や差別は、どれだけ多様性に対する理解が社会に広まったとしても、完全になくなることはないと思っている。

私が中学生のとき、自分の性についてスクールカウンセラーの方に相談したことがある。私のように性自認について相談に来る人は多いらしく、Xジェンダーについて理解してくれていた。理解している。ただそれだけのことで、悩みを持つ当事者としては何よりも嬉しい。多様性の時代とは言えど、自分の性について他人に打ち明けることは難しく、とても勇気がいる。その中で少しでも理解してくれる人がいるだけで、「生きる」の難易度が格段に違う。深く学んで隅から隅まで理解して受け入れてほしいとは思っていない。性的少数者がいるということをはんの少しだけでも知ってもらって、話したときに「そうだったんだね」と言ってもらえることが幸せであり、救われるのである。

この感情は、願いは当事者になってみないと理解しづらい。何故言い切れるかと言うと、私も中学生になるくらいまで当事者ではなかったからである。Xジェンダーなんて言葉はもちろん見たことも聞いたこともなく、世間で多様性が重視されるようになったのと同時期に色々なことを知った。タイでは数十種類

の性別区分があること。「Xジェンダー」という性があり、自分がそれに当てはまるのではないかということ。自分が知らないだけで、身近なところに性的少数者がいること。そして、その人達に対する世間の理解がまだ追いついておらず、偏見や差別が生まれていること。これらのことから、自分が持っていた偏見や差別を言葉にしてしまいう前に正しい知識を得ることができて良かったと思った。

そして同時に、どうしたら偏見や差別が少しでも減るかを考えることができた。完全にはなくならないものだからこそ、一つでも減らす努力が、自分はもちろん社会全体で必要だと思った。私が生まれる何十年も前までは、男は外に出て働き、女は家を守り子を産み育てるという暗黙の了解があった。そして男性の方が地位は高く、女性には参政権が与えられなかった。そんな状況でも立ち上がった女性が法律を変えるきっかけとなり、今の私達はこの時代の人達よりは男女間の差別が減っている。

だが、それでもまだ「男は」「女は」と言う人がいることも事実である。今では〇〇ハラスメントと呼ばれつつあるが、それが当たり前だった時代の人々からしたら、いきなり多様性だのハラスメントだのと言われても、順応するのに時間がかかるのかもしれない。ここに男・女だけでなくそれ以外の性も入ってくるのだから、混乱する人もいるだろう。だからこそ性的少数者や多様性に

ついての正しい知識をもっと分かりやすく、色々な場面で伝えていく必要があるとともに、それを理解し、受け入れることも重要だと思った。「男は」「女は」が当たり前だった時代から、「多様性」が当たり前な時代に切り変わっていくことが、今の日本の社会の課題である。これが達成されたとき、性的少数者はようやく「自分らしく」生きることができる。ありのままの自分で社会に出て「生きる」の難易度が上がらないまま生活できる。そしてそのときには、「性的少数者」などという言葉もなくなっていることを願う。

当事者になって痛感したのは、誰にも言えないということ。辛い、苦しい。だが話すと言われるか分からない。この複雑であり切実な心境こそが、「自分らしく」生きることをより困難なものにしているということ。あることがおかしい偏見や差別に怯える自分がいる。本来、堪えることすらおかしいはずだ。人には人権という人が「人らしく」生きる権利があるのだから。歴史は繰り返すと言われるが、かつて日本の女性が参政権を得たように、いつか性的少数者が辛い思いをせずに済むときが来るのだろうか。今の私にはこれを伝えていくことができないが、社会が変わって怯える必要がなくなったとき、「自分らしく」生きるために、今も私は生きている。

生きているということ

愛知黎明高等学校

二年 荒川 侑里

私が看護科の高校に通う中で、多くのことを学び、感じる事が日々増えていく。将来の職業として看護師を志す私にとって、生と死は常に隣り合わせの存在であり、これをどのように受け入れ、向き合っていくべきかを考えさせられる。

「生きる」ということは、単に身体的に存在することだけではない。その裏には、感情や思考、そして人とのつながりが密接に関わっている。私たちは毎日多くのことを感じ、考えそして他者との関係を築いていく。看護師としての役割を考えると、患者さんとの関わりが特に重要である。患者さんやその家族の生きる喜びや苦しみを共に感じる事が、看護の基盤だと考えた。生きていることは、自己だけでなく他者との関係性を大切にすることもであると私は思う。

看護師として働くことを目指す私にとって、生と死の現実とは避けて通れない。病床にいる患者さんを前にしたとき、私はどのように接し、どのようにサポートするべきかを常に考える。なぜなら患者さんが抱える恐れや不安が多いからだ。特に、終末期の患者さんとの関わりは私にとって最も心に残る経験になると予想している。生と死の狭間で揺れ動く

患者さんが、どのように自分の生を全うしたいと願っているのかを理解し、寄り添うことは看護師としての責任感を強くする。この瞬間を通じて、私自身の「生きる」という価値観や意義も深まると感じる。看護師としての使命は、患者さんの健康を守ることだけではない。患者さんの生きる意味や希望を見出す手助けも含まれる。私たちがする援助や看護は単に技術的な治療やケアだけではなく、人間としての温もりや思いやりが求められる。看護を通じて、患者さんの生きる力を引き出すところが、私の生きる目的の一つである。「生きる」とは、自己の選択に責任を持つことでもある。私が看護師として働く際、患者さんの健康や安全に関わる重要な責任が伴う。医療現場では、判断ミスが命に関わることもあるため、常に冷静さと判断力が求められる。この責任は時に重く、プレッシャーを感じることもあるが、その分やりがいも感じる。自分の人生を生きているとは、ありのままの自分で幸せを感じ、自分の納得した生き方を送っている状態だと考える。ポジティブな感情やネガティブな感情も含めて、自分の納得した人生を送っている状態。つまり誰かと比べて落ち込んだり、他人の言うことに流されて後悔したり、周りの人に左右されることはないと感じる。自分で決断し、自分の主観で生きているので、自己肯定感も高いと言えるだろう。自己肯定感とは、自分自身を受け入れ、価値を認める感情のことである。

自己肯定感が高い人は、自分の強みや弱みを理解し、他者との関係においても自信を持つて接することができる。看護師という職業は、患者さんやその家族と密接に関わる仕事であり、コミュニケーション能力や共感性が求められる。自己肯定感が高い人は、他者との関係を築く際に自信を持ち、より良いコミュニケーションを図ることができるため、看護師としての役割を果たす上で有利であると言えるだろう。

そして、「生きる」ということは、人とのつながりを通じて深まる。人は一人では生きていけず、他者との関係性が人生を左右する。家族や友人との絆は私に安心感をもたらし困難になったときに支え合う関係は人生の中で特に重要だと考える。そして人とのつながりは喜びを分かち合い苦しみを共にのりこえることでより深まる。他人を大切に感謝の気持ちを持つて接することで私の生きる意味はさらに強くなる。では、他人を大切にするとはどういうことなのか。簡単に言えば、自分を大切にするのと同じように、他人の存在をありのままに認めることだ。「あの人は自分と違う。おかしいよ」と相手を否定せず、意見や性別、国籍などの違いを受け入れながら相手の存在を尊重すると言い換えることもできる。自分と相手の意見はあくまで別のものとしてとらえた上で、相手の意見に賛成できなくてもこの人にはこういう考えがあつてこんな風に言っていると考え理解する

ことが相手の存在を尊重することだ。だから自分を大切にすることと他人を大切にすることは似ていると考える。長所も短所も含めたありのままの自分を大切にしながら生きている人は他人に対しても同じ視点を持つことができる。他人の悪い面を見てもそれはその人の一部としてとらえずにその人全体を否定的に判断しない。周りの人との違いを受け入れられる、素直に相手を称賛できるためよりよい人間関係を築きやすくなる。

結論として、「生きているということ」は喜びや苦悩、成長と挑戦、人とのつながりによって形成される広い過程である。私は喜びと苦悩を受け入れながら成長を続け、他者との絆を深めることでより豊かな人生を築いていくことができている。私は将来看護師になったら患者さんを大切に想い生きている意味を見出し自分らしい看護ができるように頑張りたい。



優秀賞表彰

移りゆく社会を生きるとは

津島北高等学校

二年 安田 潤人

現代社会は急速に変化している。技術革新やグローバル化が進む中、私たちの生活や価値観も大きく変わりつつある。特に、今後二十年、三十年を生きる私たちが「生きる」ということをどう捉えるべきか、改めて考える必要がある。未来を見据えた上で、「生きる」ということの意味や価値を考えていきたい。

「生きる」という言葉には、単に物理的に命を維持することだけでなく、精神的、社会的な側面も含まれる。現在、多くの人々が「生きる」ことに対して意味を求めているが、今後三十年の間に私たちの生きる意味はどのように変わるだろうか。第一に、医学の技術やAI技術の発展によつて、私たちの寿命は延び続けると予測される。そのため、命を維持すること自体が「生きる」ことの最も重要な目的ではなくなり、むしろ「どのように生きるか」が重要視される時代になるだろう。これに伴い、自己実現や精神的な充実を求める人々が増えると考えられる。さらに、技術的な発展は、私たちが社会との関わりをどう持つかにも影響を与えると考える。現在でも、SNSなどを通じて多くの人々となることが可能だが、二十年後にはAIや仮想現実（VR）、

拡張現実（AR）などが進化し、物理的な場所や時間を超えて人々が関わり合う新しい形態のコミュニケーションが普及するだろう。これにより、人間関係のあり方も大きく変化し、個々の「生きる意味」を再び考え直す必要が出てくると思う。

現在、地球規模で環境問題が深刻化している。気候変動、資源の枯渇、生物多様性の喪失など、私たちが直面している問題は様々だ。未来において、私たちの「生きる」という行為は、これらの環境問題と深く関連していくことは避けられない。二十年、三十年後に生きる私たちが考えるべきことは、地球や次世代に對してどのような責任を持つかということだ。環境に優しい生活、持続可能な資源の利用、エネルギー効率の良い技術の導入などが、今後ますます重要になるだろう。これらは単に倫理的な問題だけでなく、社会全体の未来を左右する重要なテーマである。

また、社会的責任として、格差問題も無視できないと思う。技術革新が進む一方で、それに残り残される人々や地域も存在するだろう。そうした状況を改善するためには、経済的、社会的な分配の公正さが求められる。私たちは自分たちの「生きる」という選択が、他者や社会全体にどう影響するかを常に意識しなければならない。

テクノロジーは、私たちの生き方を根本的に変えつつある。AIやロボット、バイオテクノロジーなどの発展に

より、人間の生理的、精神的な状態を改善することが可能になると予測されている。例えば、遺伝子治療やクローン技術などによる医療が進展すれば、病気や老化に対する治療法が確立される可能性がある。

このような技術の進歩は、私たちが「生きる」ということに対して新たな選択肢を提供する。しかし、これには倫理的な問題も伴う。人間の寿命を延ばすことができる技術が登場する一方で、生命のあり方そのものに対する根本的な問いが生じるだろう。例えば、AIによる意識の移行や人間と機械が合わさった技術が進むことで、「生きる」とは何か、その意味が曖昧になっていく可能性がある。

また、テクノロジーの進化により、働き方や生活の質も大きく変わるだろう。リモートワークや自動化によつて、物理的な労働から解放される一方で、社会的な孤立感や精神的な満足感の不足といった問題が浮き彫りになる可能性もある。したがって、テクノロジーの恩恵を受けつつ、それによつて生じる新たな課題にどう対処するかが、私たちに求められる大きなテーマとなるだろう。

今後二十年、三十年の間において、「生きる」ということはますます個人の選択や価値観に依存するようになるだろう。社会が多様化し、各個人が自分に合ったライフスタイルを選べる時代が到来する中で、共通の価値観をどう築くかが重要な課題となる。

例えば、環境への配慮、社会的責任、他者との共生など、共同体としての価値観を重視することが求められるだろう。また、自己実現や自由な発想を重視する価値観が主流となる一方で、精神的な安定や心の充実を追求する動きも強くなるだろう。こうした多様な価値観の中で、私たちはどう「生きる」のか模索し続ける必要がある。

二十年、三十年後を見据えた時、私たちが考えるべき「生きる」とは、単なる命をつなぐことではなく、社会や環境、他者との関わりを深く意識し、共に生きることの重要性を再認識することだろう。テクノロジーの進化、環境問題、社会的責任など、未来の課題に對して、私たちは柔軟かつ責任感を持つて対応していく必要がある。それぞれが自分に合った生き方を模索し、他者と協力しながら、より良い未来を築いていくことが求められる。



佳作受賞者3人

全体の講評

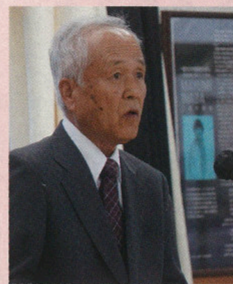
審査委員長 高橋 寛直

稲葉真弓賞も15回目を迎え、今年もたくさん
の応募をいただいた。「生きる」という今回のテー
マは、意外に考えづらいものなのかもしれない。
今生きている私たちにとって、時には空気のよ
うな存在であり、時には苦しみや悲しみの中で
味わうものであり、また、充実した生活の中で
喜びやうれしさとともに味わうものである。そ
の中で、「生きている」と結ばずに、「自分
はこう生きる」という意志覚悟が表れた言葉
で結んでくれた作品が多かった。人ごとでなく、
自分のこととして考えてほしいというテーマに
迫ってくれたと思う。

あふれている。
人とのつながり、変化、感謝、苦悩、不安、
楽しさ、挑戦。今回の作品の中に、何度も出て
くる言葉である。驚いたのは「生きる」という
個人的なことか、実は人とのつながりの中で語
られていたことである。

今回応募してくれた多くの高校生が生きてい
く営みを考えることで、自分を、社会を見返
す機会としてくれたことをうれしくも頼もしく
思う。そして敬意を表したい。

残念ながら稲葉真弓賞は幕を下ろすことにな
ったが、地域の高校生たちが自分の生活を見
つめ、未来を考え、過
去に思いを巡らせてく
れるきっかけとなれた
ことに存在を示すこと
ができたと思う。未来
ある若者たちに、この
気持ちは引きついでも
らいたいと切に願う。



受賞者代表挨拶

最優秀賞
美和高等学校

栗崎 美桜さん



私は生きていることの意
味について考える中で
私たちが単に生きる存
在ではなく、他者との
関係や社会への貢献を
通じていけることの
本質を見つけていくことが重要だと感じました。
現代社会は急速な変化と多様な価値観に直面し
ています。貧困や差別環境問題など、私たちの生
活に大きな影響を与える課題がたくさんありま
す。このような世界の中で私たちは自分自身の
存在について問い直し、「どう生きるか」という

問いに向き合う必要があります。哲学者たちは
十代からこの問いに取り組んできましたが、現
代を生きている私たちもまた自己の価値観を見つ
け、自分らしく生きることが求められます。

また、他者との関わりの中で幸福感や満足感
を得ることができるといえます。意見を尊重し合
い、協力的に社会課題の解決に貢献することは、自
分自身の存在意義を見出す重要な行為でもあり
ます。私は地域活動やボランティア、SNSを通
じた意見の発信など、小さな行動でも社会に
影響を与えることができると考えています。多
様性を認め合いながら、より良い未来を築くた
めに、一人ひとりが自分にできることを考え、
行動することが大切だと思います。ご清聴あり
がとうございました。

全入賞作品を、津島高等学校三稜会のホームページ (<http://www.sanryokai.com>) に掲載します。
また、これらの受賞者本人による朗読をクローバーTVで放送する予定です。

とくばん『三稜会懸賞論文 朗読発表』

クローバーTV 7月11日(金)~20日(日) 111ch 毎日 10:00~、19:20~



放送日時は、クローバー
TV公式HPからも
ご確認ください。

○今回応募数 (9校からご応募をいただきました。)

五 条	1	美 和	5
愛知黎明	45 (代表作14)	津 島 東	14
清 林 館	34	杏 和	2
津 島 北	69 (代表作10)	愛知啓成	13
津 島	344 (代表作4)		
合 計 527 (提出分97)			

※選抜業務に困難が生じたため、各校に応募作品の絞り込みをお願いいたしました。
ご協力いただき誠に有難うございました。

○その他

最優秀賞・優秀賞、佳作作品を津島高校三稜会会報・別冊「懸賞論文特集」(令和7年7月末発行予定)に掲載します。

入賞すべての作品と第1回からの最優秀賞と優秀賞作品は、三稜会ホームページに掲載してあります。ご覧ください。

三稜会ホームページ <http://www.sanryokai.com>

